

天狗と鬼

佛教学 八木 透

1、日本の民俗信仰の中の天狗と鬼

①昔話・伝承の中の天狗と鬼

a 「酒呑童子」や「茨木童子」などの伝説の中の鬼

「茨木童子」に登場する鬼の住処は、京の愛宕山であるとされている。また比叡山麓の八瀬に伝わる「八瀬童子」の伝説とともに、京における鬼の住処と、修験道との関わりについて考えてみる必要がある。

※愛宕山には平安時代に天台宗と真言宗両義といわれる白雲寺が建立され、以後この寺院が愛宕山の実権を握ってきた。中世には多くの修験者が愛宕山に住んだところから、愛宕権現太郎坊とよばれる天狗と考えられるようになった。一方その本地仏として勝軍地藏が祀られた。⇒修験者=天狗⇒「鬼」に習合してゆく

②京における愛宕山と比叡山の背比べの伝承

愛宕山の方が比叡山より少しだけ背が高かったため、怒った比叡山は愛宕山を殴った。しかし一番高い箇所を殴り損ねたので、以後も愛宕山の方が標高が高いままである。愛宕山の頂上付近の窪みは、比叡山に殴られた跡だという。⇒巨人伝説と修験道の影響

2、日本の民俗芸能の中の天狗と鬼

①霜月神楽の中の鬼=奥三河の花祭

花祭に登場する鬼は、基本的には村里へ幸をもたらす存在だと考えられている。それは「山見鬼」・「榊鬼」・「朝鬼」あるいは「茂吉鬼」といわれる鬼たちで、大きな鬼の面をつけ、草鞋を履き、大鉞を手に釜の周りを伴鬼を付き従えて舞う。なお、東栄町中設楽・河内は明治になって、花祭が神道化し、それにもない「山見鬼」・「榊鬼」・「朝鬼」の角が落とされ、それぞれ「須佐之男命」・「大国主命」・「猿田彦命」となった。山見鬼は花祭で最初に登場する鬼であり、中央の釜を山と見立てて、山を割る仕草をして舞う。翌朝になると、大鉞を手に掲げ、腰に榊の枝を挿した榊鬼が現れる。榊鬼は力強い足どりで大地を鎮めていく。榊鬼と花太夫との問答において、「汝は何者なれば」との問いに対して、榊鬼は「愛宕山の天狗、比叡山の小天狗、山々嶺々をわたる荒霊、荒天狗とは我がことに候」と答える。ここにも愛宕や比叡が登場し、また榊鬼は“天狗”であることもわかる。最後に現れる「朝鬼」（「茂吉鬼」ともいう）は手に槌を持ち、山を割る所作をとまなう舞

いを舞う。⇒花祭における鬼は、「反閉（へんぱい）」といわれる、地面を強く踏みしめる所作を行い、大地に潜む悪霊を祓って村人たちに幸をもたらす存在である。⇒鬼から神への転換

②山の神としての天狗

日本の民俗世界においては、天狗は山の神、山の妖怪とみなされ、山での怪異譚や神隠しの原因として語られることが多い。また歴史的にみた場合、たとえば平安時代から鎌倉初期においては、天狗は必ずしも形が定まっておらず、「鬼」と同様に「得体が知れぬ恐ろしいもの」という抽象的なイメージで語られている。それが中世になって徐々に形が固定化してゆく。⇒修験道との習合

③大天狗と小天狗

大天狗は鼻が高く、山伏の服装をして、羽団扇を持って空中を自由自在に飛翔する。また小天狗は背中に翼を備え、鳥の嘴を持っている。⇒大天狗には、愛宕山太郎坊・比良山次郎坊・鞍馬山僧正坊などの名が付けられ、修験道の中で作られたものと考えられる。⇒小天狗の姿は、「飯縄三郎天狗（飯縄権現）」の影響があるものと思われる。⇒いずれにおいても、天狗のイメージは修験道の強い影響のもとに作られたことは間違いなく、さらに古代においては山の妖怪の主役であった「鬼」の座を、中世になって「天狗」が奪ったことを意味しているともいえるだろう。

④「異端」としての天狗と鬼

政治権力に対抗する、いさよ秩序からいさよ反秩序、権力に歯向かう存在としての鬼。またそれは天狗にも代わりうる。さらに天台密教や真言密教という、仏教の正当な教え、仏の教えにまったく属さず抵抗する存在としての鬼、さらに天狗。また別の角度から見てみると、政治権力に抵抗する「異端」としての存在が「鬼」であり、仏教の教義に抵抗する、仏教の「異端」としての存在が天狗であったといえるかもしれない。

4 むすびにかえて

☆近代社会・民俗（基層）社会・伝説世界=混沌・不安定

⇒天狗・鬼の持つ両義性、可変性が顕著

☆近代社会・表層社会・仏教世界=秩序・安定

⇒天狗・鬼の持つ人間の憎悪・怨恨等、完全悪的性格が顕著